

はしがき

「しっかり食べて『自立支援米』 南三陸町、被災者に配布」

避難所から仮設住宅への入居が進む宮城県南三陸町で六日、全国から支援物資として寄せられた米を「自立支援米」として被災者らに配った。町は「しっかりと米を食べて、自立に向けて頑張してほしい」。

震災後、町には全国から大量の米が届けられた。避難所での炊き出しなどに使ってきたが、町内外に仮設住宅が完成し、入居者らに支援物資が届きにくくなり始めたため、これまで備蓄してきた米約六〇トンを一世帯二〇キログラムずつ配ることにした。

津波で自宅が流され、避難所で暮らす千葉さとりさん（七六）は仮設住宅への入居を希望している。「何と言っても米が一番うれしい。安心するし、勇気が出てくる」と話した。（asahi.com〔朝日新聞社〕2011年6月6日）

これは、本書の終章（第8章）のプロトタイプとなる論考を構想するにあたって、きっかけとなった記事である。東日本大震災から3か月、津波で壊滅的な被害をうけた地域での、ささやかな試みを紹介したこの記事は、現代の社会福祉が抱える「ある特徴」をととてもよくあらわしている。

必要としている人に何かを配るという行為は、社会福祉や社会保障と呼ばれるものの本質の一つである。一方で、何かを配るときに「この言葉」をつけることは、必ずしも過去からずっとそうであったわけではない。むしろ、それはせいぜい四半世紀の間に日本社会に広まった一種の流行のようなものである。

福祉国家というものが徐々にリアリティを失っていき、国家の役割を縮小し、個人の責任を強調するような主張が力を強めていく時代の空気なのかで、それ

は生まれ、少しずつ勢力を拡大して今に至る。

「この言葉」は、「自己決定」、「自己責任（論）」、「自己啓発」という言葉が今日的な意味で使われるようになったのとほぼ同時期（1980年代後期から1990年代）にあらわれた。いずれも「個人化社会」、「後期近代」などと呼ばれる事態と深く関係し、「権利」も「責任」も全てが「自己（個人）」に還元され、それらは自由に選択可能なものと考えられるようになった（後期）近代におけるイデオロギーから派生している。これらは、個人の選択と義務を強調するという点では、新自由主義（ネオリベラリズム）という政治と親和的であったけれども、英米で「この言葉」に類似した政策が進んだのは、中道左派政権のもつてであり、日本においても「この言葉」がより強化されることになったのは、民主党政権の数年間であった。そもそも何かを配分しようとするときに、「この言葉」を付随させること自体が、右派左派を超えた現代社会の特徴であるといえる。

日本の社会福祉の分野において、「この言葉」が導入されていない領域を見つけることはもう難しくなった。高齢者福祉、障害者福祉、児童福祉、母子（父子）寡婦福祉、生活保護、ホームレス対策に若者支援……。 「この言葉」は至るところで積極的に用いられ、もはやそれを不自然だと騒ぐほうが珍しい。

——さて、ずいぶんと紹介が遅れてしまった。本書が題材とする「この言葉」、被災地の救援物資にまでその名を冠するこの言葉とは、「自立支援」である。本書での一連の研究は、この「自立支援」という言葉（概念）を通して、現代の社会福祉の特徴を分析することを目標にしている。

30年前には存在しなかった「自立支援」という言葉は、現在社会福祉の領域のあちこちで見られる。主にそこでは、「どのように（対象者の）自立を達成するか」に焦点が当てられているが、「自立」を漠然と良いものととらえて、それに至るテクニカルな手段を模索するだけでは、より大きな構造上の問題を捉え損なってしまう。なによりまず、「自立」の具体化とその多面的な問い直しこそが必要とされているのではないだろうか。

「自立」とは具体的にどのような状態であり、水準を意味するのか。「そこ」に送り込む「自立支援」とは、何に寄与し、貢献しているのか。それを重視する価値規範は、なにとの対立のなかから生まれ出てきたのか。その発展は社会福祉にどのような影響を及ぼすのか……。

以上を問うことは同時に、そもそも誰が「自立」しているのか。それは（政策）目標として目指すべきものなのか。「自立」と「非自立（依存）」は何によって分けられるのか。その価値は「福祉」における理念をどう変容させるのか……といった原理的で根源的な問いにまでさかのぼりうる。もちろん、本書はそれらすべてを網羅するものではなく、すべての解を与えるものではない。ただし、そのいくつかの問いの契機となることを目指している。

筆者である私は、長くはないけれども短くもない期間、生活保護の現場のなかでものを考えることができた。たとえばこの言葉によって、「貧困」が個人の方で克服可能なものとされ、与えられた条件のなかで適応と自立を追い求められるという経緯を目の当たりにしながら、それでもこの言葉の使い勝手の良さに、行政職員としての自分はずいぶんと助けられてきたように思う。ただし、はじめてこの言葉に出会ったとき（もう10年も昔になる）の違和感と、無邪気に使われている「自立」の名を冠する「支援」がしっかりと腑に落ちることはなかった（なぜ「支援」でなく、「自立支援」なのか）。この違和感が本研究の端緒であったし、ここまで続けてきた理由でもある。

本書は、大阪市立大学大学院創造都市研究科に提出した博士論文「日本型ワークフェアとしての自立支援施策の研究：『自立支援』概念の批判的検討」に加筆・修正を加えたものである。また、本書の刊行にあたり、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の助成を受けている（課題番号：JP16HP5170）。

「自立支援」——この言葉の意味内容と背景を理解するために研究をはじめ、できるだけ急いだつもりであったが、ここまでずいぶん時間を要してしまった。その間に、この言葉はますます一般的なものとなったように思える。それでも本書が、日本の社会福祉や社会保障、そして「支援」という一筋縄ではいかない行為にかかわっている人びと（もちろん当事者を含む）の手に渡り、この言葉をめぐる思考の手がかりになれば幸いである。

2016年12月12日

桜井 啓太